芦田恵之助先生の実践に学ぶ

第２回　国語授業法　ワークショップ　報告

昨年度に続き、今年度も１２月２６、２７日にワークショップを開きました。

今回は、再現授業を試みました。芦田先生の高弟 鈴木佑治先生（いずみ会創設者）がお亡くなりになる１年前の、昭和４２年１月３日～６日まで開かれた第５４回全国国語教壇修養会（青森県南部町立平良崎小学校）で５日、６日に１時間ずつ扱われた学図３年下「ブレーメンのがくたい」の教壇筆録を再現するものでした。

再現授業は、２６日の午後、浅川児童館との共催で「童話に親しもう　オリジナルストーリを作ろう」活動の一環として行いました。児童館が３年生を対象にして募集してくれましたが、申込者は３名でしたので、当日、併設の学童保育の２年生に呼びかけたところ５名の参加があり、８名で行いました。以下、流れを記します。

①　学級初めのゲーム　田中先生担当

２人１組でお互いに「タイ」と「タコ」になって遊びます。お互いに左手の掌を合わせたらゲームの始まりです。指導者が「た、た、た、タコ」といったら「タコの人」が右手で相手「タイ」の手の甲を打ちます。でも、その時に、「タイ」は左手をさっと動かして打たれるのを逃れます。「タイ」といったら「タイの人」が打ちます。
指導者が、どういうかを聞きながらお互いの間合いを楽しみます。
参観者も一緒に活動し、和やかな雰囲気が出てきました。

②　読み聞かせ　司書の松川さん担当

この時には、学童の１年生も１０名ほど参加しての、２つの童話の読み聞かせでした。最初は、ロシアの民話「おおきなかぶ」です。超大型絵本をめくりながら、「うんとこしょ、どっこいしょ」のところは、一緒に声を出して楽しみました。１年生が喜んでいました。次は、「ガラスのめだまときんのつのヤギ」（ベラルーシの民話）でしたが、その前に、手提げの中から動物のぬいぐるみを出しながら動物の名前を当てさせたり、７つ出した動物の中で一番たくさん童

話に出てくる動物はどれだろうかと考えさせたりしました。猫が一番多いという話をしてから「ガラスめだまときんのつのヤギ」を読み聞かせてくれました。最後に、この絵本にも猫がいましたと、最後の絵を見せました。おばあさんの近くに猫が描かれていました。楽しい演出の読み聞かせになりました。

③　ブレーメンのがくたい　再現授業　山本先生担当

　再現授業がしやすいように整理した台本を午前中の準備会で参観者に配布しながら説明してくれました。（教式のホームページ参照）筆録に従って、「一よむ」で順番になった２年生の５名も頑張って読んでくれました。ところどころ、台本通りの応答になりませんでしたが、大事なところでは「鈴木先生の問い」は精選されていることが確認できました。授業の最後に「これで、勉強を終わります」と山本先生がいうと、「これ、勉強だったの」と、驚きの声を上げる子がいました。参加した子供たちからすれば児童館の活動なわけで、勉強という意識はなかったのでしょう。でも、集中して取り組んでくれました。（３年生の学級なら筆録通りの結果になりそうです）

④　オリジナルストーリ作り　橘田・高畠・田中・丸山先生担当

　再現授業で粗筋を理解したところで、所々に「会話文」を挟むようになっている画用紙で作った「ブレーメンのがくたい」に書き込みをして、自分の「ブレーメンのがくたい」を作る活動をしました。最初に、やり方を説明して、最初の場面をみんなで一緒に考え、発表してもらい、それぞれの考え方のよさを確認して作業に移りました。３つのグループに分かれて、それぞれにグループに支援に入って最後までアドリブを入れました。そして、最後にさし絵に色を付けて終わりました。色塗りは、時間がなかったので最後まで行きませんでした。それで、続きは、自分でということにしました。

⑤　他の訳者による「ブレーメンの楽隊」の紹介　松川さん担当

　グリムは、ドイツの人で日本でもいろいろな人が翻訳していること、そして、表紙の絵もそれぞれ違いがあることを３冊の絵本を示しながら説明してくれました。絵本を作った人がどこに一番力を入れているかが分かることなど、表紙の絵の役割りについても一緒に考えさせてくれました。

子供たちから「面白かった。来年もやりたい」という声が上がりました。１時から３時まで連続しての活動にも集中していました。子供たちの頑張りに拍手を贈ります。

その後の反省会で、「楽しい活動になったこと、児童館との共催も、それぞれの役割を理解した上でできたのではないか」と関戸館長さんからお話いただきました。
再現授業（鈴木先生や先達の指導を体得する一方法）について、どのような工夫が必要かを今後も検討していきたいとまとめました。

２６日の午前中は、１０時から１時間、東浅川福祉センターで教材の「ブレーメンのがくたい」を読み、第一次指導概観についてそれぞれに考えました。その後、概観するということは「５Ｗ１Ｈ」をはっきりさせるということなので、
いつ(when)　ある日（朝から晩まで）
どこで(where)　村、森の中の一軒家
誰が(who)　４匹（にわとり、いぬ、ねこ、ろば）
何を(what)　どろぼうたちを
どうした（how）　楽隊で驚かせて追い出した。
どうして（why）　宿無しの腹ペコな４匹だったので
等が出てきました。でも、授業する場合には、どんな手順でどのように展開するのがよいのかが問われます。芦田教式では、題目（題名）から扱うことを教えています。そこで、「ブレーメンのがくたい」なら何から入るかを話し合うと「楽隊」から考えるのがよいだろうと決まりました。
①　この「楽隊」の楽器は、何か。
②　この楽隊の編成は、何人か。
③　この楽隊の演奏を聞いたのは誰か。
等が、問いとして出てきました。
区画については、配布した教材が分けられていましたので、原本との違いを確認して、どうしてこの区画になったのかを手引きと関連付けて考えてみました。登場人物をはっきりさせるために工夫さ

れた区画であることが確認できました。（手引きは、各区画の中の登場人物を書き出す）

１　にわとり
２　犬
３　ねこ
４　ろば
５　どろぼうたち
６　四ひき
７　どろぼうたち

第一次指導の「六とく」は、板書された語句を関連付けることが仕事ですので、何から考えていくと繋がりやすいかを考えました。

①　四匹とは → にわとり、犬、ねこ、ろば
②　この四匹が、見つけたのが何か。
③　四匹が、そのどろぼうたちにしたことは。
④　それで、どろぼうたちの家が四匹の家になったという話

等が考えられるとまとまりました。

その後、浅川児童館に移って、会場を作ったり、再現授業について説明を受けたりしてから昼食にしました。

２７日は、１０時から１４時まで光村３年下（詩を楽しもう）（物語を書こう）のグループと光村６年（海の命）のグループに分かれて教式に沿って指導案作りのワークショップをしました。その後、１５時まで板書と鞭の使い方を実習しました。

詳しくは、指導案のサイトをご覧ください。（グループでのものとは違いますが、参考にしてください）